

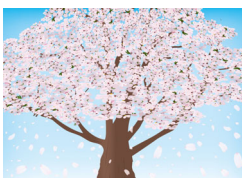
ねがいのいえニュース 第73号

社会福祉法人ねがいの杜 広報紙・2025年4月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0046 さいたま市西区宮前町812-2

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail info@negainoie.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



寒暖差の激しい毎日を経て、ようやく訪れた春の日、みなさま、お元気でお過ごしですか？各地で起きる大災害や火災に、止まらない紛争、そして誤った政策によって引き起こされる経済危機と、世界はどんな方向に向かっていくのか不安になりますが、私たちは目の前にいる利用者のみなさまと、豊かに過ごす日々を大切にしていくのみです。

クラウドファンディングへご協力ありがとうございました。

生活介護やじろべえの畑に災害用バリアフリートイレを設置するために、1月から3月までクラウドファンディングを実施しました。多くの方のご協力で、目標額150万円を達成することができました。心より感謝申し上げます。すでに下地のコンクリ打ちが済み、コンテナが運ばれてくるのを待つばかりです。4月中旬に設置が完了する予定ですので、その際にはサイト上で報告をいたします。



続けて次のクラウドファンディング実施へ向け準備中です。次は、2軒の生活介護、やじろべえ・ハナミズキに、プールを造設する予定です。こちらは、特に全国の障害者施設へ、小さな施設でもプールを所有することができる、というモデルを示したい想いがあります。



寄付をいただいた方には、宿泊券とプール利用券をお返ししたいと考えております。2月に完成したばかりの新やじろべえは、宿泊用の居室を備えております。近辺には、鉄道博物館や川越の小江戸城下町などがありますので、遠方の施設、障害者家族のみなさまに、やじろべえで宿泊し、埼玉観光の拠点としてご利用いただきたいと思います。

昭和に逆戻りするのか？

障害のある方が家族から自立して生活するグループホームが今、全国に増加し、その数は増えすぎたとも言われ、国は新規の設立に総量規制をかけることを検討している。しかし、その多くは、障害が軽く自立度の高い人を対象とし、強度行動障害と呼ばれる方や医療的ケアを必要とする方を受け入れるホームは増えていない。その一番困っている方たちが入居先を見つけれないまま新規の指定を規制していいのだろうか？

しかも、大型の入所施設はもう作らないという国の政策がある。家族が倒れたら誰も知る人のいない遠くの施設へ連れて行かれるという、昭和から続いてきた悪しき習いが終焉するのは素晴らしいことだと思われたが、生まれ育った地域で暮らすことができるホームもまた作られないとしたら、重度障害の方たちはこれから一体どうしたらいいのだろうか？

放課後デイもヘルパーもなかった時代、追い詰められた家族が、わが子を殺したり、心中する事件が後を絶たなかったが、今、時代はまるでその頃へ逆戻りしようとしているかのように、悲劇の報道は、むしろ増えつつあると感じられる。

追い詰められた家族を支える待望のシステムのように進められている地域生活支援拠点は、果たして救いの一手になるだろうか？

2月のフォーラムでは、実践者から「緊急時の受け入れに困難がある」と報告が上がり、アドバイザーは、「放課後デイや生活介護などでいつも関わっている事業所に受け入れてもらえるよう、お願いに回りました」と発言されたが、夜間の支援は担当外だと認識している日中系の事業所が、果たして受け入れてくれるものだろうか？

ねがいの杜は、利用者の24時間を支え、緊急時には夜間でも自宅へ駆けつけ、宿泊も可能にしてきた。世界の全てを救うことはできないが、出会った人の全てを支える、という理念を訴え実践してきた。結局は、それを全ての事業所が実践するしか、解決の道はないのではないかと感じる。

昨年の小児在宅研究会では、医療的ケアの方を支援する熱意の高い参加者が集まるシンポジウムの中で、様々な実践報告のあと、客席から「グループホームについてはどうでしょうか？」と質問が上がり、パネリストから、「中学生くらいから定期的にショートステイを利用し、泊りに慣れていくのがいいのでは」という助言がされたが、それもまた、ねがいの杜が実践してきたことである。

数年前、グループホーム勉強会で、ある60代の知的障害の方を支援してきた人たちが、入居先が見つからないまま一緒に暮らされている高齢な家族の窮状を説明し、行政の職員と市議会議員へ、グループホームを作ってください、と強く訴えていた。

しかし、国はすでに民間で開設できるよう法整備している。事業所を立ち上げ運営するのは事業者であり、今、訴えているその支援者こそ、その責任を負っているのではないかと感じた。



重心デイネットワークの総会でも、重心児の母として事業所を始めた方たちが、登壇した国会議員へ、重症児が利用できるショートステイが足りなくて困っている窮状を伝え、増設を訴えていたが、そこでも同じ疑問を感じた。「なければ創ればいい」を標榜しているのに、宿泊支援になると、みな途端に、「誰か作ってください」になるのはなぜだろうか？

出会った人を生涯支える、と提唱してきたねがいの杜は、今年の10月で、目標としてきた50人の居室が完成します。最近になって、多くの見学者が訪れるようになりました。運営上の苦労や注意点などを詳しく説明しているうちに、何時間も過ぎてしまいますが、みなさま、熱心に質問され、聴いていかれます。私たちは、他の事業者にも同じように実践していただきたいと願っています。全てをお話しますので、遠慮なく、見に来て、そして話を聴きにきてください。

卒園式を終えて

松本 望

去る3月15日、第3回児童発達支援とっちゃん卒園式が執り行われました。今年度の卒園児は過去最多の5名。平日のお忙しい時期にも関わらず、全卒園児の保護者の皆様がご参加くださいました。

1年前の今頃、新しい環境に戸惑っていた子どもたち。緊張して硬い表情をしている子、泣いてしまう子、心を開かずひとりになろうとする子、ニコニコと笑顔を作って不安をごまかそうとする子…表現の仕方はそれぞれですが、それぞれが不安と戸惑いを抱えた状態での新年度のスタートでした。1年前に利用を開始した3人はもちろん職員ともはじめましてです。しかしそこから少しずつ、楽しい時間、嬉しい気持ちを共有することで、少しずつ少しずつ職員との信頼関係を築きあげていきました。職員たちはそれぞれが本当に一生懸命子どもたちのことを理解しようと努力しました。

「好きな遊びは何かな」「今なにに困って泣いているのかな」

「どんな関わりをしたらこの子が安心できるかな」

職員ミーティングで、それぞれの課題を話し合うことはもちろん、

「こんな遊びをしてみたらとても楽しそうだった！」

「こんな関わりをしたら落ち着くことができた！」「はじめてこんなことにチャレンジできた！」

など、ポジティブなこともたくさん共有しました。それを繰り返していくうちに、職員の気持ちが伝わったのか、子どもたちの自然な笑顔が増えていきました。

子どもたちには本当にいつも、たくさんのことを教えてもらっています。昨日まで怖がって出来なかった遊具にチャレンジできたとき。うまく動かせない身体を一生懸命に動かして手を振るように動かしてくれたとき。利用者さん同士がにっこりほほえみ合っていたとき。今まで辛いことがあっても自分の中で抱え込んでいた子が、大人に身を預けてたくさん泣いてくれたとき…。この仕事をしていると、本当に毎日毎日大きな喜びや幸せを子どもたちが与えてくれます。

ビックリするほど繊細で、こちらの想いが筒抜け。家族や職員の不調にすぐ気付いてしまう。大切な人のために頑張りたい！そんな、とても優しく、とても頑張り屋な子どもたちから、日々大切なことをたくさん学ばせてもらっています。

ねがいの杜では、数ヶ月に一度、指談の先生がいらっやって、子どもたちの言葉を聞いてくれる時間があります。そこで大抵の子どもたちは、

「自分が気持ちを伝えられる日があるなんて！」

と、驚きとともに大きな喜びを表現します。児童発達に通う子どもたちは、お父さんやお母さんへの感謝を伝えてくれることが多いですが、学齢が上がるにつれて、

「私は他の子たちとは違うの？」「気持ちを伝える術がない」

「周りの人たちに、自分がちゃんと理解していることをわかってもらえない」

などといった、生きる上での辛さを訴えてくることも多くなります。中には「絶望」という言葉で表現する利用者さんもいました。

現在児童発達支援を利用している子どもたちも、きっとこの先、今まで以上に大変なことがたくさ



んあると思います。絶望するような気持ちになってしまうことも、もしかしたらあるかもしれませんが。でもそんなときには、ここでたくさん頑張ったこと、嬉しかったことを思い出して、とっちゃんて過ごした時間を「こころのねっこ」にして、強く生きていってほしいと強く思います。これからも、子どもたちとたくさん笑って過ごせることをとても楽しみにしています。

柴田先生の指談

国学院大学の柴田保之先生は、体のどこか一部でも動かせる箇所があればクリックできる装置などを駆使し、重症児の言葉をキャッチする試行錯誤を積み重ね、やがて、指のかすかな動きで書かれる文字を読み取る技術を身につけられた。そのスピードは驚異的で、言葉の話せない重度障害の方との間に会話が成立するほどである。支援員や他の利用者を叩いてしまう行為が止まらない、強度行動障害と呼ばれる たかしさんと、柴田先生の通訳を介して、話をさせていただいた。

「今日は、たかしさんとゆっくりお話しさせてください。いいですか」

「はい、よろこんで」

「いつも人を叩いてしまいますね。たかしさんが、それを自分では止めることができなくて困っているのはわかっています。でも、それでもやはり、そんなことをしてはならない。どんなに障害が大変であっても、だめなことをしない人にならなくてははいけないと、私たちは思っています」

「ぼくもそう思います」

「やじろべえには、他にも似てる人がいます。そして、たかしさんより障害の重い人もいますが、小さい頃からねがいのいえに通ってきた人たちは、大きなパニックにならずに過ごせています。彼らは、つらいことがあると、その度に気持ちを聞いてもらい、癒される経験をしながら育ってきました。たかしさんは遠くから引っ越してきて、3年前に私たちと出会ったから、心に抱えたトラウマを癒される経験をしてきませんでした。でも大丈夫、時間はかかるかもしれないけど、今までの苦しかったつ

気持ちは、必ず癒せます」

「そうなれたらいいと思います」

「ひとつ、気になっていることがあります。私たちは、たかしさんが本当は何でもわかっていることを知っていますが、たかしさんのお父さん、お母さんは、たかしさんが重度の障害がある人だから、人を叩くのは仕方がない、それは障害のせいだと思っているようです。そんなふうに思われているとしたら、たかしさんは悲しいのではないですか」

「はい。とても悲しいです。でも、お父さん、お母さんには、迷惑をかけてきたから申し訳ないです」

「悪いところは、きっと変われると信じています。私たちが支えるので、一緒に頑張りましょう」

「こんなにちゃんと向き合ってもらったのは初めてです。よろしくお願いします」

その日以来、いい日も悪い日もありながら、落ち着いて過ごせる日が少しずつ増えている。

行動障害と呼ばれる方に関わる全ての家族、支援者の方に、もともとそのような人はいない、そのようになってしまった人がいるのだ、と理解していただけたら幸いです。

